特集―読書の楽しみ

読書の意義が実感される読書指導

中学生の読書を考える会

1 中学生だからこそ個に応じた読書指導を

中学校での読書指導は、小学校以上に重要な時期ではないかと思う。中学生の読書離れという現状のみから言っているのではない。自我の確立する中学校時代に、読書の良さを生徒に認識させられるかどうかが重要な指導ポイントだと考えているのだ。

秋田喜代美氏の『読書の発達過程』（風間書房）には、中学生に読書の意義を認識させる読書指導の大切さが詳細なデータ分析を基に述べられている。つまり、中学時代に読書の意義を認識した生徒は、その後読書に親しむ生活を送っていく可能性が高いと想像されるのである。

2 「朝の読書」活動に思うこと

私の勤務する学校でも、朝の読書活動は行われている。この活動の良さは今更語る必要がないと思われるが、ただ「読む時間を与えればよい」というわけにはいかない。生徒の多くは、もともと読書の価値を感じている。だから、読む時間が与えられることで、読書に没頭する。しかし、どのクラスにも読書にやむなく参加している生徒が見受けられ、この活動が万能ではないことを感じさせる。このような生徒に対してどう働きかけていくか、個に応じた、おしつけにならない指導が必要である。

読書は、個人的・個別的なものである。まず、この考えを忘れずに生徒に対応していきたい。思春期の生徒の好みときたら千差万別、学力差も大きい。書棚を前に本を選びかねている生徒に「この子にはどんな本をすすめたら、夢中になって読むのだろう。」と考え、本をすすめる。それができるためには、生徒への理解と指導者自身の読書の幅の広さがないとできない。これは言葉でいうほど簡単なことではなく、すすめた本を断られることも結構ある。

ところで、さほど読書家でない私自身の情報源の一つを言えば、図書館関係・国語科関係者で読書好きの人々とのネットワークを広く持っていることである。

3 生徒のこだわりを活かした授業を構想しよう

私は、読書を核にし「話す・聞く」「書く」「読む」活動を組み込んだ総合単元をよく行う。もちろん調べ学習も行う。授業を構想する時、私が心がけるのは、生徒の一人一人のこだわりを活かすことと、生徒同士の交流を大切にすることである。生徒のこだわりの本を学習材にしたり、好みを活かしたりすることで、生徒はより本気を出す。生徒が本気で学習に打ち込んだ時に、話す力・聞く力・書く力・読む力がより伸びるのだと思う。そして、本気で語られた言葉に、他の生徒は心を動かし、学びを深めていくのだと思う。

4 中学生にも絵本を

私は近頃、絵本に凝っている。短いのに、その内容の良さ・豊富さに、多くの可能性が感じられる。大人が読んでも、感動がある。発見や驚き・疑問に思うこともあり、だからこそ、意見の交流もしたくなる。読書指導の学習材として最適ではないかと思える。

しかし、当の中学生は絵本に見向きもしない。絵本は幼児が読むものと決めつけている節がある。活字が苦手な生徒に絵本をすすめても、断られることが多いのだ。

どんな絵本だったら中学生が感動したり共感したりするのだろうと、いろいろな出版社や団体から出されているおすすめ絵本のリストを探し、絵本を読み進めた。実際、授業中に読み聞かせもし、絵本を学習材として、授業実践もした。手応えもよかった。おりしも『絵本の力』（河合隼雄・松居直・柳田邦男共著、岩波書店）が出版され、我が意を得たりと大喜びしている。

ここに紹介するのは『絵本ワールド　一年七組のおすすめ本』の単元である。教室に私が選んだ生徒分の絵本を揃え、朝の読書タイムに読む。その後、授業で、読んだ中から気に入った絵本を選び、グループで紹介活動を行った。単元の最後に、紹介された絵本の中から、読んでほしいと要望のあった絵本『わたしのいもうと』（松谷みよ子作　偕成社）を読み聞かせた。その時の生徒の表情には、深い共感や感動が表れていた。この絵本は、授業で取り上げない限り、生徒がその存在に気づかない本である。

生徒が選んできたこだわりの一冊を活かし、交流することで、生徒の読書の幅を広げたり、読書の意義や喜びを感じさせていく、そのような指導を積み重ねていきたい。